

松川中央小学校

国語科 2 学年

単元名 「オリジナルのお話を書いて、ペアのお兄さん
お姉さんに読んでもらおう！」

教材名 「お話のさくしゃになろう」

授業者 近藤 哲 (2 年 1 組担任)
指導者 三石 啓介 (南信教育事務所学びの共創課)

1 本時の主眼

文の中における主語と述語との関係に気付くことができる。

2 視聴覚機器の役割

スプレッドシート (学習カード)

- 順序や前後関係を意識しておはなしが作れるように、「はじめ」「中」「おわり」の「中」のみに注目できる。

はじめ 考えた名前を入れよう！	「中」のお話を書こう	おわり
		
ある日、雲が大きい木と木の間を飛ぶ鳥をさがして行きました。	森に入ると、ふくろうのおじさんがまいてきました。おじさんは、2ひきに「ここをまっすぐ行くとどんぐりが山ほあるよ。」とどくいに教えてくれました。チュウタとちゅうさが戦ってもらったばしょにいてみると、そこにはそれはそれはたくさんのどんぐりがおちていました。	こひきのかはんは、木のみでいっぱいになりました。そして、それをもって、歌を歌いながら、野原に帰りました。

- 作ったおはなしの「中」だけを共有し、主語と述語の関係に注目して見合うことができる。

		そしてある日、ふくろうのおじさんがまいてきました。おじさんは、2ひきに「ここをまっすぐ行くとどんぐりが山ほあるよ。」とどくいに教えてくれました。チュウタとちゅうさが戦ってもらったばしょにいてみると、そこにはそれはそれはたくさんのどんぐりがおちていました。
		ある日、雲が大きい木と木の間を飛ぶ鳥をさがして行きました。おじさんは、2ひきに「ここをまっすぐ行くとどんぐりが山ほあるよ。」とどくいに教えてくれました。チュウタとちゅうさが戦ってもらったばしょにいてみると、そこにはそれはそれはたくさんのどんぐりがおちていました。
		ある日、雲が大きい木と木の間を飛ぶ鳥をさがして行きました。おじさんは、2ひきに「ここをまっすぐ行くとどんぐりが山ほあるよ。」とどくいに教えてくれました。チュウタとちゅうさが戦ってもらったばしょにいてみると、そこにはそれはそれはたくさんのどんぐりがおちていました。
		ある日、雲が大きい木と木の間を飛ぶ鳥をさがして行きました。おじさんは、2ひきに「ここをまっすぐ行くとどんぐりが山ほあるよ。」とどくいに教えてくれました。チュウタとちゅうさが戦ってもらったばしょにいてみると、そこにはそれはそれはたくさんのどんぐりがおちていました。

- 修正が必要な部分だけを打ち直して、そのまま作ったおはなしを印刷できる。

3 授業の概要

全9時間扱いの「書く」の学習で、主な指導事項の「知識及び技能」は、「主語と述語の関係に気付く」「語彙を豊かにする」、「思考力・判断力・表現力」は、「事柄の順序に沿った構成」。

この単元では、「ペアの5年生につくったお話を読んであげる」という相手意識のもと、子どもたち

が活動の見通しを持てる「ゴール文」を参考に、「事柄の順序」「主語と述語の関係」「お話にあった言葉えらび」の3つを意識しながらおはなしをつくることを課題とした。

おはなしをつくる活動、発想を広げる活動の中で、常に「一人一台タブレット」ではなく、子どもたちの実態と目的に応じて、用いるタブレットの数を決めだすことが大切だと感じる姿も見られた。

本時では、「わかりやすいおはなしにするために主語が書いているか読み合おう」をめあてておはなしの「中」を読みあつた。活動、論点共に絞ったことで、主語に着目した読み合いになると予想していたが、それができていたのは1、2グループほどであつた。



子どもたちがこのような動きをした理由として考えられたのは、子どもたちは、まずは出来上がったおはなしを友だちに話したいという段階にあつたのだろうということであつた。その欲求を満たす一時間を確保したあとに、本時を設定すればまた違った子どもの活動になつたのではないかとということが考えられた。

4 研究会の要点

研究会では、「主語と述語の関係に気付くことができたかどうか」「作成した学習シートの改善点」について、意見・感想を伺つた。

前述したとおり、残念ながら主語に着目した読みあいができた児童は少なかつたが、「主語があるとわかりやすくなる」という理解が単元を通しての学習でなされていたことがよかつたという意見を頂いた。学習シートについては概ねよかつたが、シート番号と子どものナンバリングのずれなどを指摘いただいた。

5 指導者の助言と今後の課題

指導者の三石先生からは、①最初に活動の例示をし、自分の文に落として「あつ」と気付かせてからの活動という導入の方法、②実態にあつた単元の修正、③中間評価で展開の軌道修正をしていく方法などの助言をいただいた。指導事項を絞つた授業づくりについては、今後とも大切にしてほしいというお褒めの言葉もいただいた。

今後は、集団の中での話し合い活動で意見や考えを表出できない児童のため、ICTの有効利用を通じた発信方法の研究と実践を行っていきたいと考えている。